

環境と人間

森林・里山と人間

日時：平成27年8月9日（日） 13:00～15:00

講師：只木 良也（名古屋大学名誉教授）

概況



科目名：環境と人間 ～森林・里山と人間～

講師：名古屋大学名誉教授 只木 良也

1. 森林：世界の中の日本、日本の中の濃尾平野

植生は降水量によって異なり、乾燥から湿潤になるに従い砂漠、草原、サバンナ、森林へと変化する。世界の陸地面積の1/3は森林であり、日本国土の2/3は森林である。日本の森林は、亜熱帯常緑広葉樹林、暖温帯照葉樹林、中間温帯・間帯落葉広葉樹林、冷温帯落葉広葉樹林、亜寒帯常緑針葉樹林などに分けられ、植生も異なる。

愛知県の森林は県土の44%を占め、暖温帯に属する。平地部～標高300～400mでは暖温帯照葉樹林、それ以上の標高では中間温帯落葉樹林である。瀬戸～美濃丘陵などの里山は、農業・窯業の燃料などとして利用され荒廃山地復旧をした歴史を示し、現状は復旧・遷移途上の二次林が多い。上層落葉広葉樹としてコナラ・アベマキ、中層にソヨゴ、下層常緑広葉樹としてヒサカキ・アラカシ・コジイの林が多く、周伊勢湾要素特有のシデコブシなどもみられる。また、手入れ不足の人工林、マツ枯れ、タケ林の勢力拡大、カシナガ被害などの問題がある。

2. 上流森林からの恵み

愛知県が使用する水は、木曾川水系からの恵みを受けており、水量が豊富であり、良質である。また、木材も「世界一の木材」である木曾ヒノキの恵みを受けており、愛知県は上流森林からの恵みを多く受けていることとなる。

3. 「自然」を維持するために

遷移は、植生が自然に移り変わる現象であり、地衣・コケ類→草本→低木林→クロマツ林→カシ林→タブ林へと、それぞれ数十年～数百年単位で移り変わる。遷移の行き着く先は極相であり、極相は気候・土壌などで決まり、我が国では森林であるが、他国では砂漠が極相であることもある。

農林業は遷移を抑制する働きをもち、遷移の短絡技術である。そっとしておくだけでは遷移途中の自然は維持できず、人手の入った自然には遷移の抑制が必要である。

4. 里山の保全

農地・農村は、里山に支えられた。落ち葉は肥料に、木材は燃料に、灰は肥料として使用でき、里山の物質循環が成り立っていた。しかし、化学肥料・石油燃料の普及により里山が利用されなくなり、里山は開発対象となった。

里山の環境保全機能論的・生態系論的・文化論的な役割を考え、社会資本としての位置づけや、里山の都市施設としての位置づけをし、守っていく必要がある。